
仮面ライダーエルフ

潰れ梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーエルフ

【Nコード】

N9957M

【作者名】

潰れ梅

【あらすじ】

俺は吹雪 涼、ただの兵士だ。常識外れな紛争の中、常識外れな敵と戦う為に、常識外れな戦場に送り込まれる、いつ終わってもおかしくない人生を過ごしている。そんなある日、俺の目の前に一人の妖精^{エルフ}が現れた……。

どうしようもない程にメカが好きな作者が友人と共に二人三脚で書く、新たな仮面ライダーの物語。 始まります。

変遷、新説へ

——時代が望む時、仮面ライダーは必ず甦る——

どっかの誰かが言っていたセリフだ。

残念ながら俺は仮面ライダーとやらについての知識は全く無い。
職場の同僚達も知らない奴等が殆どだ。

知ってる奴に訊いてみると、昔に流行った特撮ヒーローらしい。
あまり関係の無い話だ。

だってそうだろ？ 特撮って事はつまり、現実じゃないって事だ。
生憎ご時世がご時世だけに、そんなモンにかまってる暇は無い。
たまにどっかで『仮面ライダーを見た！』なんて報告が上がるが、
それも俺達が使ってる装甲強化外骨格——シエルガードナー要はパワードスーツみたいなモンだ——を見間違えたただけだろう。最も、俺からすれば、全然似ていないの一言に尽きるが。

世界は今、戦争の真っ只中。と言っても、東西冷戦みたいな大同士のぶつかり合いじゃない。所謂『オーバーテクノロジー』とやらを発見してしまったマッドな集団が、世界征服の為に侵略活動に勤しんでるってワケだ。全く迷惑極まりないので、俺達みたいな戦闘集団がそいつらの作った兵器の駆除の為に日夜働いて、市民様の平和を守ってる。薄給だけどな、命懸けで働いてんの。

……ちよつと待った。このシチュエーション、どっかで聞いたよ
うな……？

『緊急警報。緊急警報。市街地B-4地区にクリーチャー出現。担当のシエルガードナー隊は至急現場へ向かわれたし。繰り返し、B-4地区担当のシエルガードナー隊は直ちに発進せよ——』

言ってる事が微妙に矛盾したアナウンスを聞きながら、俺はシエルのハンガーへ向かう。到着してみれば、やたら早い連中はもうシエルを着け始めていた。

いつもより少し早めにアンダーウェアを着込むと、俺流の順番でシエルのパーツを身に付けていく。腹、胸、肩、腰、腿、脛、上腕、下腕、ブーツ、グローブ。最後にヘルメットを被ると、どこかメカメカしく、自分がロボットになったような錯覚を覚える。今時はもっとスリムで身体に負担をかけないようなモデルも出回ってはいるんだが、拳動補助だか何だか知らないが人の動きを強制しようとしてやがる。そのせいもあるって、ベテラン勢は俺と同じように一世代前の機種を使ってる。

隊は四人編成の小隊が二つ。八人全員が集合すると、一気に格納庫へと向かう。それぞれのポジションに合ったマシンがあてがわれ、エンジンが唸りを上げてそれらが起動した事を教えてくれた。俺のマシンはトライシクル。前に2輪、後ろに1輪の小回りを重視したタイプだ。

各々が発進をコールしていき、俺の番が来た。

「吹雪 涼、行くぜえっ！」

叫びながらのフルスロットル。一気に最前衛のポジションに付けると、そのままぶっちぎりで現場へ向かった。

惨憺たる有様。いつもの事になっちまってるが、こればかりは何度見ても嫌だ。シエルが自動で除去してくれてるが、素顔のままでここにいたら死臭と血生臭さで絶対吐いてる。

——目標確認。クリーチャーとは言いが、正体はただの戦闘用サイボーグ獣だ。生身の人間が元になってるのか、『人間に微妙に近い』外見だが、目的に合わせてるのかただ単に興味なのか、何かしらの生物の特徴を混ぜ込んでるのがポイントらしい。今回のクリー

チャーは、蜘蛛のような多脚型で、顔だけが人間というナンセンスな奴だ。たぶん電磁ワイヤー的なものも装備してんだろ。足元に倒れる人の皮膚には、細い焦げ跡がいくつもある。

「さて、始めるか」

他の奴等の到着を確認すると、俺は超振動力ッターと小型のSM^{サブマシンガン}Gを構える。すると、それを合図代わりに後ろの奴等がバズーカやらガトリングやらを盛大に撃ち散らす。これでもクリーチャーを怯ませる程度しか出来ないから涙目モンだ。そこで真打、俺の出番だ。遠距離からの射撃にバリアを張って対抗するという小賢しい真似をされるなら、懷に飛び込んで必殺の一撃をくれてやるまで。そして、それはいつも俺の仕事だ。

「っらああああああ！！」

味方の弾に当たらないようにしながらも、トライシクルの車高を目一杯低く変形させて突撃する。運良く支援の砲撃がカメラに直撃してくれたのか、爆煙の向こう側から攻撃は来ない。一気に距離が詰まる。それを見計らい、俺はSMGを捨てて超振動力ッターを両手で構え、跳躍した。ヒュウ、カッコいい。

……なんて言ってる場合じゃなかった。あの野郎、上半身を展開してやがった。蜘蛛の下半身に人間の上半身という、どこぞの映画に出てきそうな悪趣味なソイツは、拳を振りかぶっている。

「まっず——！！」

後悔しても遅い。人間に過ぎない俺は空中での姿勢制御もままならず、そのまま拳の餌食になって地面に叩き付けられた。シエルのおかげでダメージは軽減されて——ない。いや、軽減されてるんだろ？、かなり内臓とか肋骨に衝撃が来た。いってえ、ザマねえでやんの。

「喰らえよっ！」

そうやって寝っ転がってられんのも少しだけ。第二撃が来る寸前、思いつ切り跳ね飛んで奴のツラを正面に捉える。そのまま真ん中を狙って超振動力ッターを振りぬく。しかし、次の瞬間には俺の目に

はとんでもない光景が飛び込んできやがった。

後方で支援していた奴等が、いつの間にか全滅している。真ん中に立っていたのは、カメレオンを直立させたような食事時には見たくないような奴。伸ばした舌が放電してるって事は、俺が見た死体達は蜘蛛に気を取られてる隙にコイツにやられたんだろ。恐らく、俺の仲間と同じように。

そう考えていると、蜘蛛野郎の第三撃が今度は腹を直撃した。

「が——っは」

10mも何のその。一瞬後には俺の体はビルの壁に叩き付けられていた。冗談じゃねえ、俺達はいつも仲間がいるから戦ってこれたんだ。その仲間もいなくなっちまって、俺はどう戦えばいいんだ……。

二体のバケモンが迫ってくる。俺は迷わず目を閉じた。膝が大爆笑してて動けない。最期の最期まであんな奴等のツラなんか拝んでられるかってんだ。せめて最期は可愛い女の子の胸に抱かれて静かに死にたかったぜ。畜生、こんな事になるくらいだったら通信士の娘にでもアタックしとくんだったな。

そんな妄想が、けたたましいバイクの走行音に破られる。さっきの一撃で通信機はやられちまってるから、援軍の出しようは無いはずだ。だったら誰だ、こんな所に来るのは……？

「まだ生きてるよね？ OK、後は任せて。貴方の仲間達の仇は取らせてもらうから」

冗談だと思いたい。死にかけの状態の俺の前には、予想斜め上を行く美少女が立っていた。年は十九そこらってどこか。……いやいや、ちよつと待てよ。こんな女の子1人に何が出来るってんだ、俺達が束になってかかってても仕留められなかった相手だぞ！？

そんな俺の考えを読み取ったのか、目の前の女の子はにこやかに言い切った。

「大丈夫、私は勝つから」

開いた口が塞がらないってのはこの事か。その揺るぎ無い圧倒的

なまでの自信はどこから来るんだよ。せめて武器だけでも提供しなきゃな。精一杯の力を振り絞って超振動力ツターを差し出すも、既にその女の子はクリーチャーの方へ向いた後だった。トホホ、もう肩を落とす余力もありやしない……と思っていたら、お嬢さんってばミニスカートじゃないの。重力には逆らえないって言い訳で、ちよつと中を拝見——。

「これ以上お前達の好きにはさせないよ！」

クリーチャーに向かって堂々と宣言する間にも、俺の視界にはバツチリ白とオレンジの縞模様が入っていた。こいつぁラッキーと思うのも束の間、直後には俺の視線は別の所に釘付けになった。

ポケットからマツチを取り出して火を点け、左手に握る。あつと言う間にグローブが炎に包まれるが、彼女ってば気にした様子も無い。むしろ、何か不敵な笑みなど浮かべてるじゃありませんか。点火された左の拳を右の拳に打ち付けて火を移し、そのまま腕をクロスさせて腰の位置まで下げる。ゆっくりとクロスした手を滑らせて腰の前を通過し、腰の横に持ってくる。ちょうど腹の前辺りで長い物を水平に持つ時を想像してくれ、大体あんな感じだ。

奇妙な事に、手が通過した後も火は残ってる。腰の辺りに炎の帯が出来たように見える。よく見りゃ、炎の中に何か入ってるように見えない事も無い。そして、俺は彼女のやりたい事を漸く理解した。

「変っ……身ッ……！」

勢い良く左腕を右斜め30度くらいに伸ばし、山も崩れよと言わんばかりの大音声を張り上げる。細っこい身は燃え上がった炎に包まれるが、1秒もしない内に彼女は炎から解放された。

……いや、炎の中から出てきたのは彼女じゃない。オレンジと黒の地に黄色いストライプのアンダーウェア、胸の部分は赤とオレンジが基調のアーマー。手足は銀のグローブとブーツがそれぞれ包んでいた。

しかし、一番目を引いたのはその顔だ。どこか昆虫をイメージさせるようなそのヘルメットはオレンジで染め抜かれ、黄色い角のよ

うなモノが2本、額から上に突き出している。どこまでも紅い、本当に真紅という言葉がぴったりの双眸がクリーチャー共を睨んでいた。

何てこった、これが彼女の自信の根拠か。色こそ聞いたのと違うが、これじゃまるつきり……。

「仮面ライダー……じゃねえか」

「かめんらいだあ？ ああ、このエルフの事ね。確かに似てるね。たぶんチーフの趣味だと思うよ」

気付いた時には、勝手に言葉が口から出ていた。彼女はそれに、分かりやすく答えてくれた。

チーフ。一応ここでは、上官を意味するのだろう。もしくは開発の元締めか何かか。それにしても、こいつ——エルフとやらは洗練されすぎている。俺達が着込んでいるシエルなんて、名前の通り金属の甲羅だ。全然ロボットにしか見えないし、殆ど装甲に覆われていてアンダーウェアも見えたもんじゃない。しかし彼女はどうか。装甲らしきものが見当たるのは胸と関節、後は仮面だけだ。アンダーウェアが半端なく強靱なのか、それとも絶対に被弾しない自信があるのか。

「あのさ、お前——」

「ヘルガ・月詠・アーベライン。気軽にヘルガって読んでいいから」自己紹介しながら、直立カメレオンの方に向かって大きく踏み込む。何て器用な奴なんだか。そこから先は、声をかけている暇はなかった。

ドが付く程にシンプルな、しかし確実に一撃必殺を狙った右ストレートが、カメレオンの眉間に突き刺さる。元から飛び出ている目が、さらに飛び出す程にだ。女の子がやってるなんて思えないぜ、こりゃよ。

続いて、蜘蛛野郎には電光石火を体現したような速さの手刀を見舞う。少なくとも俺には、何があったか殆ど分からなかった。手刀の飛んだ先は脚。振り終える頃には全ての脚が切り落とされ、饅頭

みたいな胴体と人間の上半身だけが残る。……げ、自分の喻えのせいで当分饅頭食えなくなった。

よく見りゃ2体とももう瀕死だ。一撃であんなダメージを与えられんのかよ……数人がかりで必死こいて倒してた俺達の立場なんてあつたもんじゃねえな、おい。

「私、仮面ライダーなんだよね？」

いや、いきなりそんな事訊かれてもね。一応頷いてあげると、ヘルガは仮面の下で満面の笑みを浮かべた……ように感じた。素顔は完全に見えないからな。

トドメは確実に期して小技で……と思つたら。全然そんなのとは真逆の事をしやがった。

高く、ただ高く。シエルじゃ絶対真似出来ないような高さまで、一気に飛び上がった。大体目測で15m程度か？ ヘルメットのHMD機能が殆ど死んじまつたせいで、正確な距離は分からなかった。

「なら、ここで叫ぶのは吝かじゃないね。……行くよ！ ライダー！ ツー！ キー……ック……！」

雄叫びと共にヘルガの体が炎に包まれ、必殺の飛び蹴りが放たれる。それは、俺が聞いた中でも最も有名な技の名前。飛蝗の遺伝子を組み込まれたあの男が編み出した、最強の技だ。

炎の矢と化したヘルガは2体のクリーチャーを貫き、そして奴等はゆっくり倒れると、爆散して果てた。

初代の奴がもう何年前の話かも分からないが、確かに。仮面ライダーはここに甦った。

吹きすさぶ風のように

2体のクリーチャーが倒されて数分。俺には何時間にも思えた沈黙の後、漸くヘルガが変身を解除する。腰に巻いていたベルトは、また炎になって消えていった。

最後の火の粉が地面に落ちて散るのを見ると、俺は自分が未だにシエルを脱いでいない事に気付いた。

とは言うものの、こいつは命を守る為の鎧だ。そう簡単には外れないようにロックがかかっている。それに、アンダーウェアってのは地肌に密着して必要があるわけで、その……あれだ、脱ぐに脱げない。科学の進歩ってのは恐ろしいモンで、アンダーウェアが破ける程度のダメージを受けた時には人体は保たないときている。

何やらかんやらで胴体部分のロックは見事なまでにイカれていて外せない。仕方ないのでヘルメットだけを外し、新鮮な空気を吸い込む。思い切りヘルガの炎が燃えたおかげで空気が入れ換わり、臭気も飛んで行ってくれたのか。久しぶりに吸ったように感じる空気は、やたらと澄んでいた。

「ところで、貴方の名前とか訊いていいかな？ 場合によっては私も上に話をつけなきゃいけないるし」

場合とか上とか、分からないんだが。そんな思いを隠し、俺は俺の名前等を告げる。

「吹雪 涼、とりあえず自衛軍の三曹……待遇官だ」

待遇官、と言うのが少し悔しい。あくまで俺達は正規軍ではなく、民間の戦闘集団に属している事になっている。

で、ここに勤めてる奴等に家族はいない。色々な事情で何も出来なくなつた奴等をかき集め、正義の味方に仕立て上げてるだけだ。

「ふうん……で、涼ちゃん。このまま帰るの？」

興味無さげに流しながらも、しっかりと名前は聞いていたらしい。しかも下の名前。いや、吹雪さんとも言われると思っただけ

にショック大きいわあ。嬉しいけどさ。

……っと。冗談は脳内に留めて。俺はこのまま帰るわけにはいかない。隊規模で動く以上、隊が全滅したら一人では動けない。他の隊の奴が欠落するのを待つしかないが、生憎と俺のポジションだけがなかなか空かない。

つまり、帰っても俺の居場所はもう無いって事だ。倒した敵の数に応じて手当が出るというシステムの都合上、実質上のクビに等しい。やってられっかい、そんなもん。

「帰るに帰れないな。ホームレス生活の始まりだ」

同情を誘うってワケでもない。冗談めかして言ってみたつもりなんだが、ヘルガはまるで捨てられた仔犬を見るような目で俺を見てきた。微妙に瞳が潤んで見えるのは気のせいかな？

「じゃあ、家に来る？ 母さんと妹がいて、ちょっと変わった家だけど」

……。

ちよつと待った。何だ、フラグか。フラグ立てろってか。どんな無茶振りだ神とやら。

足りない脳味噌をレーシングカーのエンジン並みに大回転させてる横で、ヘルガは呑気にメールチェック。新たな着信を告げるメロディも、呑気なものだった。

その呑気さとは裏腹に、ヘルガの表情が一気に変わる。携帯を閉じると殺氣じみた雰囲気滲ませながら、明後日の方向に駆け出していく。

見て見ぬ振りってのは俺の主義に反する。相手が女の子なら尚更だ。俺は急いで辺りを見回し、トライシクルを探す。

——見つけた。幸い、殆ど無傷のままホテルか何かのロビーに突っ込んでいる。ヘルメットを被り直してロックを確認するとトライシクルに駆け寄り、ざっと状態を確認する。

「フェンスチェッククリア……ベースプラス40……うし、コンデイシヨングリーン」

武装や燃料にも問題は無し。この際シートベルトなんか知った事か、道交法なんざ糞喰らえだ。

トライシクルを再起動してヘルガを追い掛け、両手を伸ばして強引に抱き上げる。そのまま後部座席に放り込むと、案の定ヘルガは不機嫌そうな顔を見せてくれた。

「もう少し丁寧なアプローチは出来なかったの？」

仕方無いだろ、時間無さげに走ってたのはお前なんだから。

呟いた言葉はヘルメットに阻まれ、ヘルガの指示に従って目的地へと急ぐ。決して快適とは言えない、ひたすらに速度重視の俺流ドライブ。ヘルガはそれに文句を言う事は無く、若干楽しそうに方向指示を続けた。こいつ、スピード狂なのか？

爆走という言葉がぴったりの運転を続けていると、微かに破壊音らしい穏やかならぬ音が聞こえてきた。

「楓華……！」

音を聞きながら心配そうに呟くヘルガ。妹だろうか、『ふーか』ってのは。

無言で更に加速し、音源へと急行する。静音走行モードに切り替わり、トライシクルは殆ど無音で走行を続ける。それを確認すると、俺はコントロールグリップの親指部分にあるカバーを跳ね上げた。

「何する気なの？」

ヘルガが訊くのも無理はない。俺の操作に連動して車体の両サイドから現れたのは、20mm口径のバルカン砲だ。

本来、対車輛用に装備されたこの装備は、意外とクリーチャーにも有効な事が知れている。トライシクルの高運動性能を活かして、バリアを展開される前に後ろに回り込んで一斉掃射って具合だ。……出来れば苦労しないんだがな、実際問題。

「だから、『ふーか』とやらが襲われてるか戦ってるかしてんだろ？ 支援射撃は俺達旧世代の奴等がやる事だ」

いつもは最前線に突っ込んでいただけに、余計に皮肉っぽく聞こえるセリフを吐いてみた。ヘルガはそれに反論する事無く頷くと、

少し態勢を変えていつでも跳躍出来るようにする。

本日3体目のクリーチャー確認。今度は狼男と来たもんだ。ヨローッパに帰りやがれよ。

野郎の前には、ヘッドホンを着けた茶髪の少女。見た目から判断すると小柄な15歳程度、あれが楓華なのだろうか。射線からはしつかり外れているのを確認し、一気にバルカンを撃ちまくる。

「楓華、大丈夫だよ。私がいるから！」

トライシクルの上から叫び、楓華の隣まで跳ぶヘルガ。その口調は、ヘルガが戦うというより、楓華自身が戦うという感じに聞こえた。

そして、楓華はそれに素直に頷いた。

「分かったよ、お姉ちゃん」

ヘッドホンを掛け直し、繋がっているプレイヤーのボタンを操作する。如何せん、こちらら狼男の周りを行ったり来たりしながらバルカン撃ち散らしているせいでロクに音が拾えない。だが、口の動きだけは何とか見えた。

——君のその煩い声が、僕の曲を邪魔するんだ——

心の底からうざったそうな顔をしながら、腰には五線譜のような帯が現れ、その内側にはエルフのモノに似た金属製のベルトが見える。

「行くよ。変身、ノイン」

殆ど呟くような小声と共に、涼やかでどこか金属的な音色が辺りに響く。

エルフと違い、楓華の変身は一瞬で完了した。身長はヘルガと同じくらいになり、白黒のモノトーンに水色のアクセントで揃えられたアーマーとアンダーウェア。澄んだ金色の眼は、最早クリーチャーを『モノ』としてしか認識していないように見えた。

こうなれば、俺はもう出番無しだ。邪魔にならないように少し離れた所にトライシクルを止め、降車する。

変身の様子から見るに、エルフが炎を操るように、楓華の変身し

たノインは音を操るのだろ。しかし、『音』でどうやって攻撃するんだ？

「意外と便利なんだけど……まだ制御しきれないかも。逃げてね」
肩の装甲を撫でながら、さりげなく警告してくる楓華。いや、結構物騒な事言ってるんだけどさ。

気付いたら、ヘルガが俺の後ろに隠れている。盾として使われていると考えるべきか、それとも頼りにされていると考えるべきか。そんな様子を見て、楓華は仮面の下で苦笑しながら宣言する。

「うん……まあ、良いよね。行くよ」

いやいやいやいや、全ッ然良くないんですけど。取り敢えず逃げない限り、俺も危ない。ヘルガを背中にくっ付けたままじりじりとトライシクルの後ろへ移動し、安全を確保する。スマン、愛機よ。

その直後。爆音と共に楓華の目の前に白い壁のようなモノが生まれ、狼男の体が吹き飛ばされる。音速を超えて突き出されていたのは楓華の正拳だ。

「音だけを操るんじゃない。『音に関する事象』の大抵を操るから、制御出来ないんだ」

その声は、どこことなく震えていて。たった今放たれた自分自身の力を恐れているようだった。ゆつくりと狼男が倒れていく。楓華はそれに背を向け、明後日の方向に歩いていく。

そして——爆発。

変身を解いた楓華は、泣き笑いのような表情を浮かべていた。
「化物みたいだね、僕。こんなの望んで手に入れた力じゃないのに」

哀しい声を溢し、コンクリートの壁に寄りかかる楓華。俺が見ている間に、その体は音もなく地面に崩れ落ちていた。

溜め息なんか吐いている暇すら惜しい。今するべき事、イコール楓華の介抱。場所が悪いので、俺はヘルガに助けを求める。

「少々変わってようが構いやしない、案内してくれ」

シエルの助けもあり、軽々と楓華を抱えてトライシクルに搭乗す

る。ヘルガはそれに首肯で応え、後部座席の上から辺りを見回すと指示を出してきた。

それに従いながら、俺は今日1日の事を思い返してみる。部隊の全滅と仮面ライダーとの遭遇、家に招待されたと思ったら力を制御出来ない妹ライダーの出現と来たもんだ。人生が2、3度あっても味わえないような体験を、僅かに1日で。

「ありえねえよな……」

そう、常識ではまずありえない。だが、その『常識』とやらは大衆が作り出した偏見に過ぎない事を俺は知っている。

早過ぎる流れに戸惑い、疲弊したか。俺の意識は、ヘルガの自宅前に到着すると同時に途切れる事となる。

「いつ……きし」

翌朝、俺はトライシクルのコクピットで目覚めた。ヘルガは楓華の事で頭が一杯だったらしいし、仕方無いか。

半ば諦めながら降車し、ドアをノックする。勿論シエルは着つばなし、ヘルメットは外している。むさ苦しい事この上ない。

「はあい、どちら様？」

瞬間、俺は神様とやらの存在を疑った。

扉を開けてくれたのは、20代前半にしか見えない女性だ。蒼い髪に鳶色の瞳は、どう考えても日本人のそれではない。アニメの世界から迷い出てきたのか、この人は。というか、名前も名乗らずにノックしただけの俺に対して扉開けるか。不用心にも程があるだろ。

「あ、母さんに涼ちゃん。どうしたの？」

熱暴走寸前でフル回転する俺の頭に、ヘルガが止めを刺した。

ちよつと待て、『母さん』？ どう見ても年齢的には『姉さん』

だろう。しかも、どこをどう経由したらここまで劇的な変化をするんだ。家族3人揃って身体的な共通点は、痩せ形という事以外は無

い。

「ああ、貴方が吹雪さんでしたか。ヘルガ達をありがとうございました。母のカトヤです」

母の、という部分を強調するカトヤさん。止めてくれ、マジで姉にしか見えないから。よく見たら、カトヤさんの後ろに楓華が隠れている。余程なついているんだろうか、たまに服の裾を掴んでいる。ホント、何歳なんだこの人は。不老不死の薬でも飲んだのか？

「さてさて、今日もやって来ました！」

「お客様に、母さんの実年齢公開タイム」

娘2人がやけに盛り上がり、カトヤさんはカトヤさんで困ったような笑みを見せるだけ。

口でドラムロールをしながら待つ辺り、毎度の事なのか。もういい、諦めた。俺は何があっても驚かん。カトヤさんが実は39とかでも――。

「さ……39です」

その日。月詠家という名前の暴風とあまりにも早すぎる展開が、俺の常識を吹き飛ばしたのだった。

怪物的なビート

俺がここ、月詠家にやってきてから数週間。昨日のニュース曰わくクリーチャー共はヨーロッパに狙いを変えたらしく、ここんこはなりを潜めていた。貴重な男手であり、シエルがあるから（未だに脱げてないんだよな、これ。排泄パックが外付け式でユニバーサル規格だから良かったが）力仕事も大丈夫だろうと言う事で、労基法や何かを軽く無視しまくった各種労働を押し付けられながらも、何だかんだで家族として過ごす事となった。

とりあえずは20代イコール最年長という事もあり、長男として暮らしているんだが……。

「馬鹿兄、後で洗面所の水漏れ直しといて……」

ほら来た。ヘルガは『涼ちゃん』で通してくれるんだが、楓華の方は俺が兄になると決まったその日からこれだ。何で15にもならないようなのに馬鹿呼ばわりされなきゃならんのやら。これでデレ期が来なきゃ全く泣けるぜ、チクシヨウ。

「この吊り戸棚付けたら行く……このチビ子が」

うわ、つい言っちゃった。初めて見た時はブーツで嵩上げてたそうだが、目測でも140行か行かないか程度の身長は楓華曰わく『バグ』らしく、指摘するとかかなりの確率で怒る。ついでに、興奮して抑えが利かなくなるのか、大音量の金属音を叩き出してくれるから困ったもんだ。シエルだって鉄壁じゃねえんだぞ、電装系が不具合起こしたらただの鉄塊だ。

「チビ子言っな……」

…… あつれ、こんなはずじゃないんだがな。クリーチャーが出なくなっってから、だいぶこんな感じだ。

ふらふらと自分の部屋に戻っていく楓華を見送りながらシエルのパワーを活かして一撃で釘を打ち込むと、マニピュレータの出力を精密作業モードに切り替えて洗面所へ。元々シエルってのは力仕

事に従事する作業者の補助になるように生まれたものとかで、何か先祖帰りした気分だ。

洗面所の隣の、バスルームから水音が聞こえる。大方ヘルガがシャワーでも浴びてるんだろう。タオル取ってとか何とか言ってるっぽい。まずはこの微妙な水漏れが迷惑極まりない水道を…… っと？

「直らねえ……」

参ったな、こりゃ。蛇口のコマが劣化して割れたか？ とりあえず、水道の元栓締めに行かねえとなあ。

「涼ちゃん、タオル取ってよー」

冗才談。誰が好き好んで女の子のハダカ拝みに行かなきゃならねえんだよ。覗き見るなら布地があつた方がよいね、俺としては…… だが、このままほっときやますます煩くなるのは目に見えてんだよな……。

「へいへい……」

居候同然の同居人としては、家主一家には逆らえないんだな、これが。トホホ、情けねえなあ。

タオルを手に、すぐそのバスルームへ。開けるぞ、と一言断り、手だけ中に突っ込んでタオルを手渡す。たったそれだけなのに、やっぱり他人は他人だ。

その時になつてみりゃ、お互い妙に緊張してしまう。曇りガラス越しに、ヘルガの顔が茹で蛸みたいに真っ赤になつてるのが分かる程だ。

「平和だねえ——」

「平和じゃないよ、全然」

何気なく呟いた一言は、扉の向こうのヘルガに思い切り否定された。いや、戦争真っ盛りつてのは分かつてるつもりだが、そんなに叩きつけるような言い方せんでも……。

「平和じゃないんだよ、涼ちゃん……」

炎の仮面ライダー、エルフ。特別な力があるつたつて、心はただの少女だった。シエルがあるうとなかろうと、兵隊としていっつも

ドンパチやって同僚逝くのを見送ってた俺とは違うって事を、改めて痛感するよ。

「涼君、少し良いかな？」

何だかんだあつて食休みも修理も終わった午後。我等が家長、カトヤさんからお呼びがかかる。大抵こういう時、カトヤさんは簡単な仕事を回してくれるからありがたいんだよな。

「OKス。今回はどんな御用で？」

テンプレと化した返事をしながら声が聞こえた場所へ。

「いい加減、そんなシエル着けてばかりじゃ鬱陶しくない？ 今なら時間もあるし、何とか出来るかも」

いや、『外せる』じゃないのが思いつ切り気になるんすけどね？ そんな俺の心の声など聞こえるはずもなく、ちやつちやと白衣を着込んでしまうカトヤさん。なかなかサマになっている………というか、本業なのか？

「ファーストステージの技術転用だけど、大丈夫かなあ。私の担当、サードステージなんだけど……。まあ、基本的な概念は一緒だから大丈夫か」

「ごめんなさい、独り言ならもう少し小さな声で……。しかも凄く不安かつ意味不明なんですけど……」。

気弱になりかけた俺をシーブドッグのような勢いで追い立て、普段は入る事の無い倉庫まで誘導するカトヤさん。どことなく不安げな表情をしているのは気のせいだと思いたい。

重たそうな扉を開け、電気を点けたらそこは手術室と工作室の合いの子みたいな部屋だった。

「つて、ちよいちよいちよい！？」

いや、ワケ分からのんですけど？ 普通の家にこんな施設は無いよな？

「ほら、そこに寝てねー。麻酔必要かな？」

先生、指差してる場所がちゃいます。どう見てもありや作業台だ、定盤だ。人が寝る所じゃねえ。冷たい。硬い。んで、絶対寝心地悪い。いや、寝心地求めるのは間違ってたんだろうけどさ。

「涼くんは男だからさ、私じゃ運べないよ。だから、ね？」

カトヤさん必殺、『実年齢マイナス15歳な拝み顔（仮）』。思わずクラツと来たついでに、余計な事も思い出す。

「そついや、今朝方の楓華の様子がおかしかったんすけど。何かあったんでしょかね？」

俺の問いに、無言で曖昧に笑うカトヤさん。元から答えはそれほど期待しちやいなかったがね、ヨーロッパで何かあった事くらい簡単に予想出来るよ。

問答は諦め、ゴツツい作業台の上に乗っかる。瞬間。

『涼ちゃん、母さん、また来たよ！ 南西2km、放棄市街区画！』

どこことなくアンティークな感の漂うつつーかモロにアンティークな伝声管から、ヘルガの声が響く。来たって事は、おそらくクリーチャー殿だろう。とっとと退散してもらいたいんだがな、俺としては。

「スンマセン、行ってきます」

その言葉を口にしながら、作業台から飛び降りる。兵は機動なり、だ。うかうかしちゃられねえ。

行つてらっしゃい、って言われたかどうか分からないままに、俺はヘルガと共にトライシクルに搭乗、勢い良く出発していった。どこから来るのか、少しの不安を胸に抱えながら。

「でつ……けえ」

到着した俺達が見たのは、身の丈5mはあろうかという馬鹿デカイ蛙の化け物だった。

上半身は蛙、腕はやたらと前腕の長い人間、脚も膝関節が逆になった人のもんだ。水中に未練でもあるのか、オタマジャクシみたいな尻尾もある。よく考えりゃヘルガの変身するエルフは炎。大丈夫なのか、この状況？

「対戦車ヘリ来ないかなあ……？」

来ねえよ、んなもん。心中で舌打ちしながら、トライシクルの武装を確認する。補給なんて味な真似は出来てないのが現状で、バルカン砲もSMGも残弾は少ない。とてもあのガマ野郎を潰せる量じゃないってのは、ヘルガでも分かる程度だ。奥の手としては小型のMAT——Missile Anti Tank、つまりは対戦車ミサイルだ——があるにはあるんだが、効くかどうかは向こうさんのハダ次第。つまり、俺達は勝てるかどうか分からんワケだ。

「そういえば剣あつたじゃん、アレ有効なんじゃない？」

まだ変身しないヘルガが言う。確かに、超振動カッターは振動数を上げていけば大体どんなブツでも切り裂けるような理屈にはなっているらしい。だが、あまり振動数を上げ過ぎると、使ってるこっちにもダメージが来るといってもない武器だ。本体のバッテリーをフル充電した上にシエルからの電力供給も上乗せして最大出力で起動すれば、いくらシエルでも中の人ごと粉々に砕け散るつてのを同僚が身をもって示してくれたしな。

「博打になるぞ。それも賭け金は俺の命だけじゃなくてな」

そう、砕け散ったのは同僚だけじゃない。野郎から半径5m以内の空間にいた連中や存在したモノも丸ごと、猛烈な振動のおかげでみんな土塊みたいになっちまった。

んな武器使つてられるかってのが本音っちゃ本音なんだが、こいつ以外の格闘武器はクソの役にも立ちやしない。電磁警棒？ 爆圧トンファー？ 使ってるこっちの方が嫌になる。電磁警棒は相手が完全装甲してた時にはまるでただの木の枝みたいなもんだし、爆圧トンファーは威力は申し分ないが2回殴っただけで弾切れするわ肩も痺れるわで外した後が物凄くハイリスク。というかトンファーの

方は名前どうにかしろ、ダセえから。

「あー……気付かれた」

のっこのっこと肩を揺らしながら歩く巨大蛙人。その目がくるくる回り、俺達の方に向いた。

さあてどうすつか。周りの確認と逃げ道の確保、出来れば敵を何かの罠にハメて始末したい所だ。

「――変身――！」

あー、こいつは。真っ正面からぶん殴るしか能が無いのか？ いやあない、援護だ援護。バックスなんていつ以来だよ畜生。訓練所出てから殆どフォワードだぜこちらら。

廃ビルの壁を駆け上がってから蛙人に飛びかかり、拳を叩き込むヘルガ――元い、エルフ。体に大きくめり込むが、それだけだ。逆に、トランポリンみたいに跳ね返されてやんの。

「涼ちゃん、バルカンっ！」

おい叫ぶな馬鹿ヘルガ、こっち見るな馬鹿蛙。仕方無く車載のバルカン砲を顔面に向かって発射してみるも、あんまり効いてない。というか、少し怒ったか。くすんだ緑色の皮膚に若干の赤みがかかり、長い手を振り回して電柱やら街灯やらを破壊していく。元々は海に近く、クリーチャーの来る危険性が高かった為に、この街は見捨てられて久しい。人っ子1人いやしないから、いくら壊してくれても構わない。上の連中は、解体に予算を割かなくて済むとかで喜んでるだろうよ。

ただまあ、放棄区画だけあってトライシクルのマップ機能が通用しない。建物があるのは分かっているけど、それが何かまではこの目で確かめてみん事にはバツチリ不明なわけだ。

「こいつ、このっ、このおっ！」

エルフさんエルフさん、そういうナマモノって尻尾引つ張っちゃマズいって教わらなかった？ あ、さいですか、どうも……。

尻尾を掴み、何とか侵攻を食い止めようとするエルフ。放棄区画と一般市街区画の間には、今頃は防衛陣地が敷設されてるだろうに。

こんな思考が出来るのも、俺が名も無き一般兵的な立場にいたからか。前線に赴くイコール死亡宣告に近いような軍団だったしな。たまに誤射貰うし。

勿論、こんな仕打ちを受けて蛙人が黙ってるわけはない。湿気たゴム風船を踏んづけたような音を発しながら、尻尾を振ってエルフを引き剥がそうとする。牙も爪もないエルフは粘膜質な尻尾にしがみつく事も出来ず、凄いい勢いで吹っ飛ばされた。

「言わんこつちゃ無い……！」

「涼ちゃん——！？」

反射的にトライシクルをアクセル全開、アスファルトに叩き付けられる前になんとかキャッチしようと向かって――。

ぱくつ。

俺は、たった今目の前で起きた現実が理解出来なかった。

エルフが、消えた。今まさに俺の腹辺りに頭突きをかまそうと言うかのように突っ込んで来た、エルフが。最初からそこにいなかったように、消えてしまった。

俺とトライシクルに影が落ちる。ヤツだ。あの蛙人だ。見上げてみると、嘲笑うような表情で俺を見下ろしている。

「てンめえ……！！！」

ブチンと、勢い良く何かの切れた音が聞こえた気がした。それが、俺の堪忍袋の尾だつて事に気付くのに、そう時間はかからなかった。眉間の一点を目掛けてバルカン砲とSMG、MATの一斉射。弾が切れてもかまやしねえ。エルフがやられた、その事が頭の中で跳ね回って俺を突き動かす。

弾着の煙で、視界が塞がれる。その数秒だけが、俺に残された最後のチャンス。

「トドメだ、ありがたく受け取りやがれ馬鹿蛙があつ――！」

絶叫しながら腕を駆け上がり、頭へ。弾を喰らって意識が朦朧と

しているのか、抵抗は無かった。

超振動カッター、セツト。シエルの損傷具合も考え、耐えられるギリギリの威力までゲージを上げる。後は、ヤツの体との勝負だ。ブレードが起動する。超高速での振動から生まれる騒音を感じし、ヘルメットの聴覚機能がシャットダウン。世界から音が消えたような感覚になる。

必死にもがく蛙人。それも既に遅い。トライシクルが自動操縦で逃げて行き、シエルの固定機能が無ければ手からすっぽ抜けても可笑しくないような振動を発する刃が、蛙人の脳天にじわりじわりとめり込んで行く。蛙人の皮膚を守る粘膜が、超高速振動で発生する熱で蒸発していく。

灼かれ、切られ、徐々に蛙人の頭の皮膚が裂けていく。物凄い勢いで暴れる蛙人の首に、俺は脚を巻き付けて必死に振り落とされないうちに耐える。

いきなり、煙が切り口から噴き上がる。カッターに耐えていた皮膚が限界を迎え、脂肪の層に入ったか。とにかく、無我夢中で刃を送り込む事しか俺には出来ない。

何分、何十分、何時間経ったように思ったその時。厚い脂肪の層を抜け、明らかに骨と分かる堅牢な手応え。蛙人は相変わらず暴れ続け、感覚の麻痺した俺の脚はシエルの姿勢ロック機能で何とか首に引っ掛かっていた。カッターも限界が近い。俺もそろそろヤバイ。ここで、一気に。もう、声も出なかった。振動数を少しだけ上げ、更に力をかけて刃を骨に突き立てる。

——やった。

遂に痛みには耐えかねたのか、飛び出しそうな眼を更に見開き、蛙人が路面に倒れた。こうなりゃ後はぶち抜くのは苦勞しない。全体重をカッターに乗せ、頭骨を貫通させる。その瞬間だけ、蛙人の体が大きく震えた。

手首に纏わり付くような柔らかく生温い手応えは、野郎の脳味噌か。カッターの電池もタイミング良く切れ、ヘルメットは俺に再び

周りの音を提供し始めた。

のろのろと右手を蛙人の頭の中から引っこ抜き、カッターを路面に放る。シエルの様子を見てみると、全身が返り血に染まって真っ赤になっていた。内装や装甲機能もかなりダメージを貰ったらしく、あちこちひび割れが酷い上に、体がエライ重い。HMDの言うには、胴体部分の筋力補助がイカレたっぽい。

ふう、と溜め息を吐く間に、蛙人の屍は蒸発するように消えて無くなっていった。環境に配慮してくれてるのは知らないが、クリーチャーは行動不能になった時には何らかの方法で体を消去するのがデフォルトの機能らしい。

後に残されていたのは、やっぱりというか飲み込まれてたエルフだ。軽く手足を振って調子を見ているからには、どうやら無事なんだろう。

……何だか安心したら、眠くなって来やがった。エルフが何か言ってるっぽいけど、聞こえやしない。あー、ちょっと休ませろ……。

空の時へ、高き希望へ

久し振りに、夢を見た。

俺がまだ学生やってた頃、東京に雪が降った日。現実だと結構珍しいが、漫画とかではよくあるホワイト・クリスマス。

明らかに人工物っぽいモノが、ハワイ付近の海底で発見された。それが隕石だったのか遺跡だったのか詳しい事は覚えていないが、とにかく大規模なモノだった。

国連主導の調査隊が、何度も潜った。その度に妙なモノばかり発見された。それらは、調査の回数が重なる毎に複雑になっていった。調査隊の中に、海洋研究開発機構に勤めていた親父も参加する事になった。

そして、元日。調査中の建造物が、半径500m程度の海域に存在した全てのモノを巻き込んで吹っ飛んだ。

狙い澄ましたかのように殺到する連中。上の方が無くなったおかげで内部が丸出しになった建造物を占有し、何を見つけたかはよく分からないが、とにかくそいつらは世界征服なんて大層な理想を掲げて、宣戦布告をしてきた。

そんなような事を垂れ流すテレビを、まだひよろつとしてた頃の俺が、ぼうつと眺めていた。

朝。小鳥が囀り、日の光が窓から差し込む、テンプレ的な一日の始まり。空腹感から判断するに、寝てたのは1日程度ではなさそうだ。

いつものように布団をどけて、シエルの起動モードをアクティブに……。

「……無い？」

出来ない。ついこの間まで俺の体を守り、ボロボロになっても文句1つ言わずに頑張ってくれたあの鋼鉄の鎧は、どこにも無かった。いや、有り得ない話じゃない。確か、ダメージを貰い過ぎた時に装甲が弾け飛んで体へのダメージを防ぐ機能があったハズだ。気を失った時にもダメージは限界ギリギリだったし、すっ転んだ拍子に起動してもおかしくは無いよな。リアクティヴアーマーだったか、そんなようなモノの技術を転用したとか……。

「重いい……」

……。

部屋の外から、ヘンな声が聞こえる。くぐもってはいるが、どうやらヘルガの声らしい。何かジタバタやらかしながら、たまに壁に頭でもぶつけてんだろうか。結構ゴツい音が聞こえる。というか、正直うつさい。段々とイライラが増していく。

「っだああうつせえええ!!」

キレた。大人気ないが俺はマジでキレた。絶叫しながらドアを蹴り開け、廊下の真ん中に飛び出す。

「わああああ!？」

凄まじい音を立てながら、ヘルガの音を出すソレは見事に転んだ。廊下の電気が点いていないだけに、どんな格好をしてるのかはよくは分からない。

「朝からガシャガシャガシャと、お前はもう少し怪我人への配慮……が……」

怒りながら電気を点けてみれば、廊下に転がっていたのは、ボロボロになったシエルを被ったヘルガだった。

「なるほどなあ……」

「ごめん、涼ちゃん……この通り」

固定されておらず、ブカブカなヘルメットの側面をお玉で叩きまくるという非常にウルサイ拷問の結果、『シエルってどんな物か知リたかった』というのが、ヘルガのシエル着用の動機だった。

だが、シエルってのはそれだけ着ても全く意味は無い。むしろ、重いだけだ。

「シエルは下にコレ着ない限りマトモに動かねえよ。つーか、ここまでボロボロになったらコレ着ても動かねえし」

つまり、俺はもう戦えない。そういう意味を込めて、軽く溜め息を吐くが、ヘルガはどうやらそれを馬鹿にされたのだと受け取ったらしい。ブスツとした表情になると、思いつ切り不機嫌オーラをぶちまけながら俺の前から去ってしまった。

あああ、何でこんなにクライい事になるかねえ。窓から見える空模様も雨降り開始3分前クサイし、どうにかならんのか？ どうにもならんか、こういう場合……。

『警報、目標接近。楓華、出動よ』

突然、カトヤさんの声が伝声管から響く。この家は船かってんだ、つたく。

……ちよつと待て、『楓華』？ 何でヘルガじゃないんだ？

『了解。お姉ちゃんはこのいう時は出られないもんね……』

諦めたような、哀しいような楓華の声。伝声管は非常用の全館放送になっているのか、会話の内容は筒抜けだ。

「カトヤさん、楓華、俺です。戦力外かも知れないけど、一応俺も行きます。俺だって、まだ打つ手は残っている」

『分かったわ。涼君、楓華をお願いね』

打つ手と言っても空軍式に言えばFox4、つまりは特攻って事だ。それを知ってか知らずか、カトヤさんは俺にも出動許可を出した。騙したようであまり良い気はしないが、行くしかない。機動力だけでも補ってやらんな。

「トライシクル、コンディションオールグリーン。行くぞ」

数分も経たない内に庭先の駐車場から飛び出す俺達。楓華は予備のヘルメットを被って俺の後ろにくっ付いている。

目標は相も変わらず放棄区画、時間から見てもうそろそろ防衛ラインに近付いている頃だろう。

「僕だって、好きでこんなチカラがあるワケじゃない。でも、お姉ちゃんも馬鹿兄も頼りにならないなら、僕がやるしか……ないんだ」

そんな楓華の声は、ポツポツと降り出した雨の中でも聞き取る事が出来た。流石にこのままのメンタルで戦いに放り込むとヤバイ。

「泣き言は言える内に言っておけ、チビ子。みんな殺されてからグダグダ言っても無駄だしな。……それと、今回のカタが付いたら、何か食いに連れて行ってやる」

軽くヘルメットを小突きながら話す俺に、楓華はムスツとした顔で答える。

「チビ子言うな馬鹿兄、帰ったら一発殴る。で、大盛りのネギチャーシュー麺と半炒飯と焼餃子頼んで財布をスッカラカンにしてやる」
上才等。こちら博打も女も知らないだけあって、金ならちったあ自信がある。それに、楓華もやる気になったみたいだしな。

シエルのアンダーに適当なジャケットを羽織った俺を、本降りになつてきた雨が打つ。レインコートを着込んで完全防御に徹した楓華が羨ましく思えたその時、唐突にソレは現れた。

「……キモっ」

うん、気持ちちは分らんでもない。

目と鼻の無いヒトの顔に、カミキリムシみたいな長い触角。腕は蛇腹になっていて、先端に力二のハサミがあった。極めつけは胴体で、ヒトの体でありながらも腰から下はムカデと来ている。つや消しブラウンな体色は、ついさっきまで泥沼に浸かってたみたいだ。相変わらず向こうさんも趣味わりいモンを送り付けてきやがるぜ、ったくよ。

「取り敢えず、片付いたらこの音で呼ぶから。迎えに来てね」

そう言つて楓華は、澄んだドの音を出す。しかし、この雨の中で果たして俺に聞き取れるのだろうか？

そんな事を思つた直後には、楓華はレインコートを脱ぎ捨て、最初に会つたのと同じように、ヘッドホンを着ける。静かに進みながらプレーヤーのスイッチを入れ、小声で、変身、と呟いた。その言葉に反応し、楓華の腰に現れた五線譜のベルトが楓華の姿を白いライダー・ノインの物へと変える。

「……何で逃げないの？」

「どこにしようが死ぬ時は死ぬ。ついでに、お前は独りにすると泣く。それだけだ」

問いと、即答。答えを確認した楓華——ノインは、蹴つ殺す等と物騒な事を言いながら更に今回の目標であるクリーチャーへ向かつて歩いて行く。

それに気付いたクリーチャーは、迎撃のつもりなのか、口から緑の粘液を吐き出す。ノインはそれを軽々と回避するが、地面に落着した粘液を見てたじろいだ。地面が煙を上げて溶け出している。よほど強い化学物質なんだろうが、そんなもんをよくもまあ体の中に仕込んでおけるモンだ。

ノインに限らず月詠家のライダー2人は、見た感じでは遠距離で使えそうな武器は持たない。基本的に徒手格闘に能力を織り交ぜて戦うようなスタイルだから、懷に潜り込まない限りは有効打を与えられんのだ。

「楓華、奴の死角に回り込め。口からの攻撃は、そうすりゃ当たらんはずだ」

俺の言葉に1つ頷き、滑るようにクリーチャーの背後に回り込むノイン。しかしそのノインの体を、クリーチャーのハサミが襲つた。「つつ——！？」

蛇腹は柔軟性だけじゃなく、伸縮性まで持つてたつて事か。ノインは腹の辺りに直撃を貰い、思わず呻いて弾き飛ばされる。地面に膝を着いてしまったノインに向け、伸びるハサミが2回、3回と追

撃をかける。右に左に転がって避けるノインをいたぶりながら、クリーチャーは紙ヤスリで木を削るみたいな音を立てて笑っていた。

「あれだ、急げっ！！」

突然、俺にとって、聞き覚えのある懐かしい声がする。いつもは嫌がっていたが、こういう時ばかりはやたらと頼りになる奴の声だ。「ジョッシュ、こつちだ！ いるなら義乃とイルマも連れて来い！！」

ジョッシュことジョシア・ラウ、黒須 義乃、イルマ・クルー スニク。俺が最も信頼する、訓練所以来のダチだ。皆家族がいないだけあり、半分以上は兄弟意識もあつたりする。

「涼？ 涼なのか！？ すぐ行く、待ってる！！」

驚いたようなジョッシュの声が返ってくる。よし、これで形勢逆転だ。奴等は俺以上に優秀に育ったから、戦力としてはかなりのものだ。クリーチャーの方もバテてきたのか、ノインを狙うハサミの動きが雑になってきた。

「楓華、もう少しだけ耐えろ、援軍が来るぞ！」

転がりから復帰し、サイドやバックにステップを繰り返して回避に専念するノインに声をかける。それとほとんど同時に、4輪の高速装甲車が力強いエンジン音と共にその姿を現した。

「撃てっ！！」

ジョッシュの号令がかかり、狙撃担当の義乃がバリアを展開される前に対装甲ライフルを発砲。徹甲弾をクリーチャーのこめかみに見舞い、続いてジョッシュがアサルトライフルを連射。助手席からイルマが飛び出し、超振動カッターでクリーチャーの触角を切り落とした。

「みんな、耳塞いでっ！！」

ノインが叫ぶ。その指示に従い、俺は素直に耳を塞いだ。ジョッシュ達は装甲車の中に引っ込み、各部のハッチを閉鎖。

それを確認するとノインは半身に構えて、右の手で手刀を作る。それと同時に、ノインの周囲の空気が凄まじい勢いで振動を始めた。

「ライダーでありながら騎士の剣の切れ味を持つんだ……私の力、制御出来る分だけでも見せてやる」

ノインの呟きを挑発と捉えたのか。クリーチャーは怒号のような激しい咆哮と共に、ハサミを真つ直ぐにノインに向けて伸ばす。しかしノインはそれを、僅かに体を反らして回避する。左手で蛇腹の腕を2本共に鷲掴みにすると、振動でブレて見える右手の手刀で叩き切った。

自慢のハサミを失い、クリーチャーはまた吼える。得物を落とされた怒りか、それとも激痛から来る悲鳴か。

俺がそれを見極める前に、ノインはクリーチャーの前に立っていた。

「超振動っ！ライダー……パアンチ！！」

手刀を拳に変え、思い切り振りかぶると、一気に拳を音速まで加速する。マッハ越えて出来た衝撃波が辺りを襲い、白い水蒸気の傘を突き破ってノインの拳がクリーチャーを穿つ。直後、ノインの全力の振動波を零距离で喰らったクリーチャーは内側から爆ぜ、弾け飛んだ欠片は地面に落ちる前に塵となって消えた。

「僕はもう泣かない。馬鹿兄なんかに馬鹿にされない為に、お姉ちゃんがいなくても1人で大丈夫なようになる」

雨も上がり、日が出て来た。そんな中で変身を解除しながら顔を上げて宣言する楓華は、何故だか少し大きくなったように見えた。

辺りに、青空と同じくらいに透き通った、明るいドの音が響いた。

昼過ぎ、ガソリンも残り少ないトライシクルは格納形態に変形させて装甲車の上に乗つけて、俺達はのんびりと市街区画を走る。目指しているのは、川辺にちんまく存在しているちよつとした屋台だ。あそこなら顔も利くし、何よりそこの適当なチェーン店よりも美味しいし安い。先輩や教官によく連れて行ってもらっては、色々聞いた思いもある。

「ねえ、まだ？」

楓華は余程ラーメンが食いたいのだろう、さっきから数分おきにこれだ。運転してるのは義乃だが、その度に笑顔で、もう少しですよ、と答えている。ライフルから手を離している時は、義乃は基本的に優しい好青年だ。……ジョツシュと違ってな。

「なあ、お前一体何があつたんだよ。戦没公表されたと思ってたら、こんな娘連れて、しかもコイツ変身までするじゃんか」

ほら来た。何があつたもクソも無いよ、俺としては。

「俺が戦闘不能になった時に、コレの姉貴が助けに来てくれて、その絡みで家に住まわさしてもらってる。変身に関しては何も知らん、シエル系ではない事は確かだが」

「姉貴だあ！？」

俺の言葉を聞いたジョツシュが、急に色めき立つ。というか、食いつく所はそこか。すかさずイルマの平手打ちが後頭部に入り、ジョツシュは無言を言わず沈黙させられた。

「そろそろ見えて来ますよ」

義乃の声で、意識を剥奪されたジョツシュ以外の全員の目が前方に向く。いつも通りの、小さく古めかしい屋台の姿が、そこにはあった。

「おっちゃん、いつもの3つ！ それと、ネギチャー大と半炒、焼き餃子で！」

席に着いた俺が高らかに宣言する。ジョツシュは車に置き去りにされ、気絶したまま留守番だ。

「あいよっ。そっちの女の子は初めてだね、大判海苔と味付け卵、オマケしとくよ」

調理台の向こう側から、店長さんが笑顔で返す。海苔と卵が付くって事は、どうやら楓華の事が気に入ったようだ。そして、4つの丼が並ぶ。

「……いただきます」「」

「えと、いただきます」

3つの声が揃い、1つの声が遅れて来る。この店では、挨拶が来ない者に食べる権利は無いのだ。

温かい麵をすすり、各々が幸せな表情になる。何かデカイ仕事を終えたという満足感も相まって、俺も自然と頬が緩む。

「食べ終わったら送るよ。その調子だと、色々と家に用事もあるだろうしね」

早くも半分を食べ終えた義乃が言う。その目は、いつも通りの優しいものだった。

銀の兵士

結局、ジョッシュが覚醒する頃には、俺達は皆食事を終えて車を走らせていた。

皆満足げな表情でシートに身を預け、中には鼻歌を歌う者もいた。
「ああ、ここ右……んで、また右行つて、次左」

先程と変わらず、ハンドルを握るのは義乃だ。助手席に座る俺の適当なナビゲーションにも関わらずきちんと正解の道を辿って行く辺り、我等が自衛軍でも研究されている超能力者の類じゃないかという錯覚を感じる。

イルマと楓華は同じ女同士意気投合したのか、乗車してからずっと会話が続けている。

「なるほど、楓華ちゃんはユーロビートが好きなのか……。私も聴いてみようかな？」

「うん、基本的にはSUPER EUROBEATのばかり聴いてる。ELISAとかNIKOとか。あ、あと、MAX COVERIとかも」

「ふむふむ。じゃあ、私からもオススメ。フュージョン系だけど、T-SQUAREは絶対に好きになれると思うよ。特に、『TRUTH』と『CHASER』がオススメかな。絶対聴いてみて損はないよ」

等々。確か楓華が挙げたのが、俺の爺さんがガキの頃に、その爺さんの親父殿が好きだったアニメのBGMに使われてたヤツで、イルマのオススメである『TRUTH』と『CHASER』も、大体似たような時代にやってたF1グランプリと、ツール・ド・フランスのテーマ曲だったと思う。……選曲古いな、オイ。ビデオテープなる化石を実家で発掘したとは言え、知ってる俺も凄く常識からハズれた感覚なんだろうが。

「あ、そこそこ。あの角右に曲がったら家だよ」

楓華が後ろから顔を出し、目的地を指差す。大人しく座ってるっての、後部座席でもシートベルト着用するのは法律で義務付けられてんだぞ。これで捕まったら切符切られるのは義乃なんだからな、せつかくの優良免許がお釈迦になって、免許更新に手間がかかったり、マイカーの保険の割引が無くなったりしたら、どうしてくれるんだ。いやまあ、俺じゃなくて義乃が金銭的に実害を被るんだが。それにも大して怒る事無く、義乃はただ、分かりましたとだけ答えて、曲がり角で少し減速する。

しかし。

「——ッ!？」

ゴテゴテした暴走族クサイバイクが追い越して行きやがった。それも、かなり悪質なやり口で。義乃の超人的な反射神経とドライビングテクニックのおかげで避け切れたからまだ良かったが、もし運転してるのが俺だったら、確実に当てられていた所だ。

まあ、こんな御時世だから荒んじまうのも分からなくは無いが、今日ばかりは相手が悪かった。例えば半分民間系の組織とは言え、こっちは曲がりなりにも兵隊の集まりだ。簡単に喧嘩なんかふっかけていい相手じゃない。

それに義乃は、『普段は』穏やかな人間に典型的な、『キレるとヤバイ』タイプの人間でもある。そして義乃は、多少の無茶をさせる事はあっても、この高速装甲車に愛着を持っている。それを故意に傷付けようとしたり、或いは条件次第では傷付けかねないような事をした場合はどうなるか。

……もう想像は付くだろう、俺からの説明は終わりだ。

義乃は無言でカーナビに現在地を記録させると、一気にアクセルを踏み込んだ。

とにかく、全力で煽りにかかる。眉間には見事な縦皺が刻まれ、完全に殺気立ってしまっている。この状態の義乃には何を言っても無駄だ、好きにさせるしか無い。

当然のように、俺達を追い越していったバイクは慌ててスピード

を上げるが、如何せんパワーが違い過ぎる。呆気なく追い付き、ヘッドライトをハイビームにして威嚇。更には急激なギアチェンジでエンジンから咆哮を上げさせる始末で、追い越しのニイチャンは完全にビビって逃げ出してしまった。

「大人気ないぞ、義乃。俺達だけならとにかく、今は一般人を乗せてるんだから」

そう言つてジョッシュは、椅子の背にぶつかったのか、痛そうに額をさする楓華を指差す。

……正直、俺達だけの時でもなるべくなら全力で遠慮してほしいという本音は、誰も口にする事は無かった。

「ありがとうございました、助けてくれたり外食に連れて行ってくれた上に、ここまで送ってくれて」

装甲車は家の前に停車し、楓華を下ろす。玄関には、カトヤさんとヘルガも迎えに出てきていた。

「おかえり、楓華。その調子だと、今日は上手い事いったみたいだね？」

姉であるヘルガが駆け寄り、楓華の頭を撫でる。楓華はそれに元気良く首肯で応え、家の中に入っていく。

それで、外に残されたのは、カトヤさんに俺、義乃、イルマ、ジョッシュの大人組だけになる。

「……行くのね、涼君」

少しの間沈黙が訪れ、そして、カトヤさんが口を開く。俺は、返事が出来ない。見抜かれていた。ただ、それだけの事なのに。

短い間だけだったが、この数週間で、俺の家族というものに対する愛着は、まだ両親が生きていた頃並みに戻っていたって事か。行かなきゃならないのは分かっている。だけど……心がそれを躊躇する。

「別れを惜しむ必要は無いわ、涼君。あなたはこの家の人。全部が

終わったその時に、また帰ってくればいい」

悩む俺に、カトヤさんの声かけられる。その言葉で、俺はようやく踏ん切りが着いた。

「行つてきます、カトヤさん」

直立、気を付け、敬礼。相手が軍人じゃないが、俺の体は自然に動き、その一連の流れを実行していた。

それを受けて、カトヤさんはにつこりと笑つてみせる。そして、一旦家の中に入ると、ボロボロになった俺のシエルを担いで出てきた。

その損傷度にイルマが息を呑む。俺はシエルを受け取り、頭を下げた。

ありがとうございました。そう言おうと思つたが、なかなかその言葉が出てこない。その代わりに、俺は別の言葉を選んで発した。

「またいつか、みんなで」

そう言い、俺は家に背を向ける。平和な一時はもう終わった。俺は、兵士だ。

後ろで誰かが何か言つたような気がしたが、俺は構わずに装甲車に乗った。

俺を含んだ4人だけが乗る装甲車が進む。誰も口を開かず、沈黙が続いて大体10分ぐらいが経ち、耐え切れなくなつた俺は質問を投げかけた。

「報道の言つてる事が100%信用出来るわけじゃないが、クリーチャーってヨーロッパ中心に狙つてたよな、最近までは。しかし、今になってまた日本に出現してきている。……どういう事だ？」

「制圧されましたよ、欧州は。虎の子の戦闘用サイボーグ部隊も壊滅して、全軍士気低下。そのまま全滅……って流れです」

義乃が、機械的な声で俺の質問に答える。

……制圧されたって事は、まだ民間への被害は少なかったのだらうと俺は勝手に思い込む。だがそれを、続くイルマの声が打ち砕い

た。

「ヨーロッパは文字通り全滅。人はおろか、生き物なんてもうあそこにはいないわ。最後の最後までクリーチャーと戦っていたのも、正規軍じゃなくて身元不明のはぐれサイボーグ体だったって言うし、元から正面きつて戦ったところで勝てる軍隊じゃなかったのよ、あそこは」

冷たく言い放つイルマ。それを最後に、車内を再び沈黙が支配する。さつきよりも重苦しく、息をし辛い空気になってしまい、俺は質問をした事を後悔するのだった。

俺達自衛軍の本拠地は、市街地と放棄区画のちょうど境目付近に位置している。大きさはそこそこだが、実際には地下施設の方が容積が大きく、見た目に反してかなり広大なスペースを内包している。その司令部は最深部に位置し、俺はそこに1人だけ呼び出しを喰らっていた。

「吹雪君、まさか君が生きていたとはね。私としては、命があつた事を喜ぶべきか、もっと早くに帰還か連絡しなかった事を咎めるべきかで悩んでいるよ」

日焼けしたというよりは焦げたという表現がぴったりな濃い色の肌に200行くか行かないかという巨軀、スキンヘッドとサンングラスで声は低く太いと来ているから、初見さんはビビる事間違いないオッサン。これが、自衛軍の最高司令官だ。

「取り敢えず君は、今回の件で降格処分とさせてもらう。1階級降格で、三曹から上等兵へと変更となる。これが、新しい階級章だ。受け取りたまえ」

そう言つて司令は、俺に階級章の入った封筒を手渡す。中を開けて見てみると、入っていたのは上等兵の階級章ではなかった。

「……と、本来はこうなる所だが、君は単独、もしくは民間人の協

力を得て、通常であれば対応が至難であろう敵を何体か撃滅し、我々の消耗を抑制してくれた事実がある。また、戦死という事で、2階級特進の手続きも既に終了していた。そこで、三曹から2階級上がり、一曹となった君を1階級降格とし、二曹に任命する。これからも、この国の為、また人間の為に、より一層の活躍を期待するものである。――分かったか？」

司令は一気に言い切り、俺に途中で言葉を挟む猶予を与えない。何秒かの間を置いて、俺はどもりながら敬礼と共に返事をする。「り、了解です」

それを聞いて満足したのか、司令は自分の椅子に座る。そして、机に置かれた電話をとり、どこかへ短く連絡を入れた。

「失礼します」

司令が受話器を置くと同時に司令室に入ってきたのは、ジョッシュと義乃、イルマもだった。それぞれが緊張した面持ちで直立し、司令の言葉を待っている。

「さて、君達を呼んだのには理由がある。……まず、つい先日欧州が敵の手に落ちたのは記憶に新しいと思う。そして、この日本にも再び敵が侵攻し始めているのは、諸君等が一番よく知っているはずだ。事ここに至り我々自衛軍は、第4次戦力増強計画を発案。本計画を実行する事が決定された。これが、その目録だ」

司令の後ろに控えてたのか、秘書さんが俺達に資料を手渡す。適当にめくっていると、1つの項目が目にとまった。

「次世代型シエルガードナー……もう開発されていたのか？」

「そうだ。その運用には高度なオペレーションが必要であり、それが可能な人材は、この自衛軍全体を見渡してみても数は限られている。そこで、この次世代機を運用する為の専用チームを結成し、性能をフル活用してもらいたいと思っている。君達の他に、日本全国から各地の大幅な戦力低下にならない程度に精鋭達を選出したつもりだ、1つよろしく頼むぞ。……何か、質問はあるかね？」

ジョッシュの呟きに答えるように説明する司令。さっきと同じよ

うに、完全に会話のペースを掌握した話し方だ。そして、最後の言葉に反応した義乃が挙手する。

「この次世代機についてですが、既に実機がロールアウトしている旨がこの資料にはあります。……この実機は、今どこに保管されているのでしょうか？」

見られるものであれば見てみたいと、暗に訴えかける義乃。その気持ちには、俺達も同じだった。

そんな俺達の気持ちを読み取ったのか、司令は口の端を僅かに上げる。それが笑みだと気付いた時には、司令の後ろにある壁がせり上がり、その中から強い光が漏れ出していた。しばらくすると壁の上昇が止まり、光にも目が慣れて来た。壁の奥にあった物、それは……。

「どこに保管されている、だと？ そんな事は決まり切っている、最も敵の侵攻を受けにくい、ここだよ」

そう、資料の中にあつた、次世代機の姿が、俺達の目に飛び込んできた。そのほとんどが人に装着され、起動しているらしく、あちこちの機器を点灯させながら軽くそのメタリックな彩色のされた体を動かしている。

今まで俺達が着ていたシエルや、俺の嫌う新型シエルに比べ、そのフォルムは更に洗練されているように見える。関節部もきちんと装甲化され、防御範囲は拡大にアップしているだろう。そして何より目を引いたのは、そのヘルメットだ。フリッツタイプ・ヘルメットとガスマスク、少しのSF的要素を組み合わせた旧来のゴツい物とは、明らかに異なっている。

旧来のシエルに比べてやや細めなシルエットに、額からは2本の角のようなアンテナ。フェイスの、人間で言う口の辺りは吸排気のダクトが設置されているのか、何本かスリットのようなラインが入っているのが見える。

そして、眼だ。俺の使っていたシエルは直径4cm弱の小さな双眼力メラだったが、次世代機は全く違う。昆虫の複眼のように、小

さな六角形のパーツが蜂の巣状に集合し、見た感じ直径8cm以上にもなる大きなオレンジの眼を形成している。

そこまで理解して、俺は気付いた。この角と言い、この眼と言い、モチーフになった物は、俺には1つしか想像が付かない。

「これも……仮面ライダーだって言うのか？」

「そうだ。今まで得られたデータを元に、人工的に『仮面ライダー』と呼ばれる存在を再現したものだ。シエルガードナーの新しい姿、故にその名を、次世代型タイプ・ネクストと言う」

——タイプ・ネクスト、俺達の新しい力。

皆はその頼もしさに目を輝かせている。勿論、俺もこのタイプ・ネクストの持つ力強さに感動を覚えないワケが無い。しかし俺は、その力に対して一抹の不安を覚えている事も、また事実であった。

夜に融けて行く……

金属が激しく接触する音が響く。その度に、火花が辺りに舞い散り、少し暗い倉庫のような室内を数瞬だけ照らす。その合間には、各部関節のアクチュエータから発生する駆動音やメインカメラの放つ赤い光が絶えず存在している。

「そこまで！」

一際鋭く、大きな金属音が鳴ると同時に、割って入るように声が上げられる。直後、室内の照明が全て点灯し、今の今まで戦っていた2人の姿を明らかにした。

シエルガードナー、タイプ・ネクスト。

その片方は相手の首筋目掛けて手刀を打ち込もうとしており、しかし相対するもう片方はそれを右の手甲で防ぎつつ、左の貫手は正確に相手の喉仏を捉えていた。

その状態が数秒——しかし、見ている俺達にとってはかなり長い時間にも思えた——続いた後、ネクストはお互いに構えを解いてヘルメットを外した。

「やっぱり、ゼロレンジだとイルマには勝てないなあ」

「何言ってるのよ、義乃だって前よりずっと攻撃の見切りが上手くなってるじゃない」

義乃とイルマは肩を叩き合い、互いに健闘を称えながらも、きつとその影では冷静に今の戦闘を復習・反省しているんだろう。ヘラヘラしているだけでは、成長はおろか生存すら許されない。そういう環境に慣れてしまった事が、月詠家の——もっとも、彼女達の表の顔に過ぎないが——という『常識的な』日常を知ってしまった俺を苛む。

1度出撃すれば生きて帰れる保証は無い。この意味の分からぬ異形の侵攻がいつ終わるのか、見当も付かない。

……なんて、らしくもない感傷的な考えに浸っていると、義乃が

俺に手を差し出して来た。

「せっかくだし、涼も模擬戦しないか？ 徒手格闘だけじゃクリーチャー相手には僕だとキツいだろっし、技を盗ませて貰いたいな」
何とまあ、勝手な事を……。第一お前は一番後ろで対物ライフルぶっ放してるだけで粗方の敵は片付けられるだろが。

そんな心の中の愚痴を表に出すワケにも行かず、俺は立ち上がる。つい、よっこらせ、なんて言ってしまうもんだから、横でイルマが必死に笑いを堪えている。……覚えてろよ。

「さあ、構えて構えて。今回は僕が学ぶんだから、正攻法で攻めてきてくれるとありがたいな」

ナイフというよりはダガーに近い長さのブツを軽く振りながら、義乃が呼ぶ。しかしあんな30cmもあるような相手にどうナイフ1本で勝てと？

嫌々ながら前に進み、軽くナイフを振って感触を確かめる。適度に重く、硬く、それでいて手にじわりと馴染む。この感覚、久し振りかも知れない。

「それっ！」

予告無しに突き出されて来た義乃のダガーは、イマイチ迫力に欠ける。気合は入っているんだが、技術がそれに追いついていないというか……。とにかくナイフで弾くまでもなく、上体を軽く捻って避け、大きく1歩を踏み出してナイフが届く距離に入る。それに気付き、義乃も慌ててダガーを横薙ぎに振って迎撃しようとするが、もう遅い。刀身の腹、刃の無い部分に手甲を当てるようにして防ぎ、義乃の胸に軽くナイフを当てる。僅か数秒の攻防戦は、当然のように俺に軍配が上がる。義乃は再び距離を取り、ダガーを構えなおし、今度はダガーを逆手に持って首筋に突き立てるような軌道で振り下ろしてくる。しかしそんな攻撃も、腕から防いしまえば問題ない。空いている左手で義乃の腕をホールドし、逆にその首にナイフを向ける。

「なるほど、攻めたら負けなのか……」

襟のような部分の装甲に刃を受けながら、義乃が気付いた風に呟く。

「そついう事だ。元々緊急防御用の武器だろ？ 俺は普段から攻撃に使っちゃいるが、それは邪道だつての」

そう言いながら義乃を解放し、俺は義乃を別の場所へと連れて行く。格闘戦訓練に使われるアリーナから、色々な機械が置いてあるここは、俺は一応『特訓コーナー』と名付けている。中でも、バツティング練習のブースに見える所は、まだ俺が実戦に出る前に何度も世話になった思い入れの深い場所だ。

「確か最低70km/h、最高160km/hだったか、そのくらいの速度で硬球が打ち出されて来る。それを――」

「ナイフで弾いて防げ、つて事か。なるほど」

「そ。まずは遅いのから、5発毎に3km/hの割合で速度が上がってくから、無理になつたら途中でブースから脱出してくれ」

そこまで言つて俺は義乃をブースに押し込み、改造されたピッチングマシンのスイッチを入れる。うお、と軽く呻き、かなりギリギリのラインでボールを弾く義乃は、恐らくヘルメットの下では冷や汗を流している事だろう。だが。コレくらいで音を上げちまうようなら、実戦でナイフを使うのは諦めといた方が身の為だろう。実戦での教育の授業料は命その物だと考えれば、このくらいはチョロい。昔は私もお世話になつたなあ、アレ」

いつの間にか隣に立つていたイルマが、打ち出される硬球に悪戦苦闘する義乃を眺めながら感慨深げに呟く。イルマや俺のみならず、超振動カッターやナイフを使用する機会の多いフロントアタッカーの連中は、皆この硬球の洗礼を受けて一人前になったもんだ。最も、その中の半分くらいはもう逝っちゃったんだがな。

『召集。ネクスト部隊は10分後に第3格納庫へ。繰り返す、ネクスト部隊は10分後に第3格納庫へ』

昔の思い出に浸る暇も無く、突然のアナウンスが俺達を呼ぶ。やはりと言うかもうこういふのには慣れている為、全員の反応は早い。

メットを外したり、そもそもシエルを装着していない奴もいるが、そういう奴はそれぞれ自分の装備を取りにダッシュ。既に基本装備が完了している俺とイルマ、義乃、ジョッシュは一足先に格納庫へ向かうのだった。

「さて、全員集まったようですね。これから、開発担当よりネクストの装備について解説等があります。心して聞くように」

司令は会議の為に箱根の自衛軍統括本部に行ったとかで、ここ――東京の旧都心地区に配置された基地に残された秘書官が俺達を出迎えた。手に持つストップウォッチはまだ6分にも満たない事に感心しているのか、どこかその声色には普段とは違う色が見える。

「開発の酒田です。ネクストタイプの装備について、皆様にお知らせしたいと思います」

次に出て来たのは、やや頼り無さそうなヒョロツとした男。作業着の上から白衣を着ると言うアンバランスな服装に突っ込みたくなるが、そこはぐつと堪える。

「ネクストは既存のシエルの最新型、サンハチ38式に比べて最大127%もの衝撃吸収力を持っています。また、駆動伝達率も劇的な向上を果たし、理論値ではありますが駆動反応速度は遅くとも0.018秒程でしょう。この特徴を活かし、我々は従来のシエルでは使用出来ない様な強力な武装を開発しました」

プロジェクターを立ち上げ、スクリーンに開発された武器の画像が並ぶ。今まで使われていたのより更に大型のガトリング砲や弾倉の付いたロケット砲、分隊支援用のロングライフル等射撃兵器が多くある中に混じって、格闘兵器であるパイルバンカーやクロージャーム、出力を強化されたのか超振動ブレードらしき剣もある。

「また、現在に至るまで使用されて来たバイクやトライク等の高機動オプションもロールアウトからかなり経つので、更新が予定され

ています。テスト機としてこの試製41式高機動二輪車ヨンイチを用意しました」

武装から画像は変わり、少々ゴツく出来たバイクの三面図が表示される。極端に凹凸が少なく、やや丸みを帯びたデザインは、神経質なまでに空気抵抗を減らした為だろうか。これまた丸っこいライトと合わせて多少コロコロしたようなイメージを与えたのか、隣でイルマが可愛いかもとか呟いている。

「それぞれの装備に関して、データは既にリンクシステム上にアップロードしておきましたので、必要だと思った資料には目を通しておいて下さい。また、これ等の実物は、第2武器庫とここ、第3格納庫に用意してありますので、確認をよろしくお願いします。私からは以上です」

出て来た時と同じように酒田はひよこつと引っ込み、プロジェクターのスイッチも切られる。

ネクストのメットはHMDにもなっているので、席に備え付けられた小型端末を起動する必要は無い。前腕にあるカバーを開き、コンソールを少しいじると、俺の視界に様々な情報が現れる。最近は視線入力なる便利なシステムがあるので、ここから先は完全に手を使わないで済む。表示されたリストの中のバイクの項目に注目し、2回まばたき。そうするだけでメットは俺の意思を汲み取り、バイクの詳細を表示してくれる。

「わっ、凄いじゃないこのバイク」

隣で全く同じ事をやっていたのか、イルマが感心したような声を上げる。確かに加速力や最大速度は凄い。と言うか常識外れも良い所だ。ガスタービンエンジンを使ってるらしいが……。

「……はあっ？」

いや、ちよつと待て。ちよつと待てお前。俺の記憶が正しいなら、ターボシャフトはバイクに積んで良いモンじゃねえ。普通はヘリとかの航空機に積んでるモンだろう。スペックの400km/h、7m/s s っても納得だな。頭オカシイとは思えん。

軽く頭痛を覚えながらも、俺が使えるような武装をチェックし、ウインドウを閉じる。俺は相変わらず取り回しの良いSMGと超振動ブレードの組み合わせになりそうだな。マシンは仕方無いから41式に世話になるとして……。

『緊急警報。放棄都市区画にクリーチャー出撃。市街地への到達時刻は現在より22分後と予想される。ネクスト部隊は速やかに出撃せよ』

「装備確認の終わった奴は武器持って再度ここに集合……いや、やつぱり第1小隊と第2小隊だけでいい。第3から第5までは臨戦態勢で待機頼む！」

何てこつたい、と言う思考を挟む暇も与えず、ジョッシュが指示を飛ばす。自身の指揮する第1小隊と、そのサポート用にもう1つの小隊を召集し、装備を整えさせる。当然、第1小隊の構成はジョッシュに俺とイルマ、義乃となっており、それぞれ自分に合った得物を抱えてマシンに乗り込む。ジョッシュはアサルトライフル、義乃は新型のロングライフルを装備していつもの高速装甲車へ乗り込み、イルマは俺とのカブリを避けたのか背部のラッチにブルパップ式の短機関銃を2挺背負ってバイクに跨る。

「ほら、急いでよ」

イルマに急かされ、俺も背中に超振動ブレードと短機関銃を背負い、新しいバイクに搭乗する。エンジンを始動させた時点で音がかなりおかしいのは仕方ないだろう。ヘリのエンジンみたいな甲高い音がしやがる。ハンドルの間には、燃料計の他に冷却剤のゲージや速度計等々は1つのLCDに纏め上げられ、なかなかオモシロイ事になっている。

「第1、第2小隊。出撃！」

ジョッシュの号令で格納庫の扉が開かれ、ネクスト達は夜の闇の中へと放たれた。

無邪気の現れ

「いいやつはああ!!」

「うおおあああつ!」

2つの絶叫が深夜の廃墟群に響き、それに重なる様にしてヘリの――元い、ヘリのエンジンを積んだバイクの甲高い駆動音が空気を切り裂く。ちなみに、情けない悲鳴を上げている方が俺だ。だってそうだろう、かの有名な伝統あるマクラレンのフォーミュラ1カーだって、数十年前に叩き出した370km/hってのが最高速度なんだからな。バイクで400km/hを超える事が如何に馬鹿馬鹿しく無謀であるかを分かってくれ。そしてこんな化け物をノリノリで操るイルマ。一体アイツは何なんだ。メットもそれっぽいし、仮面ライダーか。洒落にもならねえよド畜生。

「涼、クリーチャー捕捉したら一撃離脱。交互に叩くよ!」

「俺はE・A・ハルトマンじゃねえっ!」

叫びながら必死に制御を維持しようとしても、気紛れなエンジンはなかなか言う事を聞いてくれない。レスポンスがいちいち数瞬遅く、一気に速度を落とすとその次に低速から高速への切り替えがスムーズに出来ん。ギアも最大3速までしか無い。ママチャリじゃねえんだぞこの野郎。そもそも1速で3桁突入出来るバイクなんて人間の乗るモンじゃねえ。フューエルコントローラ弄って翼付けたら飛べるんじゃないかと錯覚する程の最高速だ。

そんなこんなしている内にクリーチャー視認。HMDはフロントカウルに埋め込まれたカメラが3Dスキャンした目の前の野郎を三面図で映し出し、特徴を伝えてくれる。横に長く扁平な菱形のボディ、その正面中央に半分埋もれる様にして設置された単眼。関節の見当たらない綺麗なアーチ型の脚が乱雑に並ぶ姿は、美術でシュールレアリズムとして取り扱えば、たぶんB+くらいは貰える事間違いないだろう。

だが、今日の授業は戦争学実戦部門。しかも教師は俺達だ。授業料はその命で払ってもらう。

「ファーストストライク、貰った!!」

そう叫びながらイルマは何を思ったか、両手をハンドルから離して背部にマウントしてあった短機関銃を2挺共に保持し、一斉にクリーチャーの単眼目掛けて連射する。クリーチャーはバリアを展開する事も無くそれを甘んじて受け、どこから出しているのか痛みに悲鳴を上げた。

短機関銃は大口径化した分、デメリットとして標準弾倉の容量は低下している。弾を使い切ったイルマはそれを放り捨てて再びハンドルを握り、スロットルを開く。何をする気かも問う時間を与えず、イルマはクリーチャーに向かって突っ込んでいく。

「おっ……らああっ!!」

女らしからぬ乱暴な叫びを上げ、イルマはバイクでクリーチャーにぶつかっ……いや、クリーチャーを『跳ね飛ばした』。高く宙に舞い上がるクリーチャーを、俺達はただ見守る事しか出来ない。着地地点に素早く回り込み、クリーチャーの落下のタイミングを測るイルマ。武器も無いのに、だ。

「そおいつ!!」

クリーチャーが地表に到着する寸前、イルマはトンデモない行動に出た。バイクの前輪をロックし、行き場の無くなった駆動力を後輪を浮かせるのに使い、そのまま浮いた後ろ半分を横に振る。車体はクリーチャーの胴体に思い切り良く叩き付けられ、クリーチャーはそのまま近くにあった電柱をへし折りつつビルのエントランスに突っ込んでその活動を停止した。ここが放棄区画だからまだ良いものの、一般居住区だったら工兵を出して面倒な修理をしなければならぬ所だ。それをきちんとわきまえているからこそ出来る荒業だ。……というか、普通わきまえていてもやらないだろう。200kg以上の重量物を、純粹に走行のエネルギーとシエルのパワーアシストだけで持ち上げて振り回さなきゃならないんだ。そんな面倒かつ

無駄な事は、曲乗り屋でもない限り誰もやろうなんて考えない。…
…今まさに俺の目の前でやってのけた、イルマを除いて、の話にはなるが。

『あー……状況終了。撤収用意』

通信から、ジョッシュが装甲車の中で頭を抱えているのが目の前の出来事のように想像出来る。後ろで義乃が忍び笑いを堪えているであろう事を思うと、こっちまで笑いたくなって来る。こういった無茶苦茶な形でスコアを持ってかれてしまえば、舌打ちしたくなるよりももう笑うしか無いだろう。ご時世がご時世なら、動画サイトにでも車載カメラのデータをアップロードしている所だ。

『こちら第2。腹が減ったので先に帰投するぞ』

『第1了解。だがベースの食堂なら俺達のツケがそっちに回されるから、お財布落とさない様に気を付けて帰れよ』

バックアップの為に出来て来てはいたものの、全く仕事も出来ずに終わってしまった第2小隊の連中が、冗談めかして通信を送って来る。ジョッシュもこれに冗談半分で答え、通信は笑いに包まれた。

……ツケってのはマジな話だから、あいつらの財布の中身が少し心配ではあるが。

飯にありつけるのが嬉しいのか、第2小隊の連中は回線を賑わせながら帰って行く。俺達もとっとと帰還すべく、俺はバイクのエンジンを入れた。イルマ達はとくに帰り始めており、俺だけが出遅れる形となっていた。

「へえ……やっぱり安上がりで作った物は駄目かあ。今度はきちんと基幹から合成しないとな」

声が聞こえたのは、今まさにエンジンをかけようと言う時だった。誰だ、と問う必要を感じず、声のした方向へ銃口を向ける。恐らく……いや、絶対に、この声の主が今回のゲテモノを放り込んだきた張本人だろう。

「おっとと、流石に反応も並みのとは違うか。今そっちに行くから、撃たないでね」

おどけた様に——と言うか、それを通り越して他人をおちよくる様に言いながら、そいつは両手を上に上げて物陰から出て来る。何の事は無い、また別の建物の中に入っていただけで、探そうと思えば肉眼では無理でもサーモグラフィを起動すれば余裕で『見える』所だった。

「大人しく捕まって人道的な取り調べを受けるか、ボコボコにされた拳句にクスリ漬けにされて強制的に情報吐かされるか……。どっちが良いか選んで、とつとこつち来やがれ」

色々と疲労感の為か、少し乱暴な表現で相手の投降を促す。しかしその相手は、まだ自分の置かれた状況を理解していないかの様なのんびりとした様子で顎に人差し指を当てて考え込んでいる。

「うーん、運動性能はやっぱり圧縮空気じゃなくて強化生体筋繊維じゃないとね。思考回路も感覚器も、生体から培養した方がコストと時間はかかっても性能は上だし……。このままじゃ、廉価版を実戦配備するのは無理だなあ」

……おいコラ聞いてんのかこの野郎。いい加減俺頭来てるんだが正直この手元にある短機関銃^{ヤツ}乱射しなくなって来たんだが。返事しやがれ。

「……ん、ああ、ごめん両方無理。守秘義務？　つてのもあるし、僕もそこまで君達に捕まりたいワケじゃ無いしね。何より、向こうで研究開発している時が一番楽しい時間なんだ」

そう言つて、ヤツが笑つた時に、初めて気付いた。ヤツの顔が、ヘルガにそっくりである事に。

「……？　僕の顔に、何か付いているのかい？　それとも、『僕の顔に見覚えでもあるのかい？』」

そう言つた顔は、こつちの動揺の原因をはっきりと分かっていた。鍵で引つ掛けた様に釣り上がる口角は、ヘルガのそれとは正反對な残忍な笑みを浮かべていて。それに対して俺は、手元にある短機関銃を機能させる事でしか応えられなかった。

「……なあ」

全員が帰還し、明日正午までの自由待機を命じられ、寮のベッドでぼんやりと過ごしていると、急に上の段で寝ているジョッシュが声をかけてきた。

「……何だよ」

「アイツ等ってさ、何がしたいのかね。世界征服とか言ってる割には複数同時展開とかはまだやってない。何でだ？ あの戦力なら、4個小隊——中隊規模で攻めてくれば、ネクストでも勝てるかどうかなんてのは分からない。それを世界各地で同時展開されたら——」
「らしくないな、ジョッシュ。そう言うのはお前の考える事じゃねえよ」

いつになく饒舌なジョッシュ。アルコールでも入ってるんだろうかと思いつながら、その言葉を途中で強制的に遮る。そう、俺達はあくまで駒に過ぎない。対局に勝つ為にはそれぞれの駒が与えられた役割を果たせば良いのであって、何も全員が棋士になれば良いと言うもんじゃない。むしろそう言う事が起きてしまえば、船頭多くして船何とやらだ。

「敵が出て来る、俺達が出張る、潰す。このサイクルに何か不具合でもあるか？ 確かに本拠地が米国の領土付近だから本拠地に直接攻撃をかけるわけにも行かんし、海軍のSSBNがぶつ放した弾道ミサイルも再突入直前に制御を乗っ取られて自爆させられてる。どう攻めれば良いかなんぞ知ったこっちゃ無い。だが、水際でもある程度は防げているのが現状だ。海底の地雷原が敷設されるのも決定事項、来月の頭には作業が開始される。……それで良いだろ、今の所は」

ああ、と気のない返事を寄越し、それきりジョッシュは話しかけてくる事は無かった。顔は見えないが、規則正しい息遣いから考えると、もう寝ちまつてるんだろう。

「何だつてんだよ……」

……正直、ジョッシュの言いたい事も分からなくは無いが。今のまま結果を出せず、ジリ貧になってしまえば、後何年耐えられるかなんて、分かりやしない。ただ1つだけ分かるとしたら、このままじゃ人間負けてジ・エンドって事くらいだ。

……暗い事考えてどうにかなるわけじゃないな。ジョッシュの事も『らしくない』とか言えん。

今は、駒は駒らしく待機命令守って体を休めないとな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9957m/>

仮面ライダーエルフ

2011年11月14日03時22分発行